
ふたりの旅行記 ～コナン哀ものがたり・番外編4～

サブラピッド

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ふたりの旅行記 ～コナン哀ものがたり・番外編4～

【Nコード】

N7809C

【作者名】

サブラピッド

【あらすじ】

コナンと哀が奈良へ旅行にでかけます。事件も、トラブルも無縁な、まったりとした、ふたりの旅行記。

(前書き)

別に事件も起きません、事故もトラブルも起きません。まったく読んでもらえれば幸いです。「何か」起きることを期待されている人には、物足りない内容だと思います。

「奈良？」

「ああ、京都は行ったが、奈良には、行ったことはないじゃろ？」

「ああ、確かにねえけど・・・」

以前、友人の紹介で奈良の工場に工作ロボットを提供した阿笠はそのメンテナンスのため、しばらく奈良に行くことになっていた。そのことは、コナンも聞いていたが、阿笠は、コナンに、哀と共に一緒に行かないかと誘っているのである。

「でも、旅費はどうすんだよ？」

「心配は無用じゃよ。向こうが二人分の旅費を出してくれるっていうし、君達は、子供料金でいいからの」

そう、コナンと哀は、今は、小学4年生。中身は、もう20歳になるが、見かけは、小学生だから、交通費は、子供料金でいい。

「なんか、わりいな」

「今更、遠慮なんて無用じゃよ・・・それにな、君達、最近、二人で出かけたりしておらんじゃろ？いつも、わしやあの子達が一緒に・・・」

「博士・・・」

「わしが仕事をしている間、二人でゆっくり観光でもしておればいいよ」

コナンと哀は、恋人同士といっても、みかけは子供だし、周りは、その気を使ってくれるわけではない。少年探偵団の3人にしても、マセた女の子の歩美はともかく、元太や光彦は、二人の行くところ、

ついて行きたがる。

時々、哀の部屋で過したりする以外、二人だけにいるということは、ほとんどなかった。

そんな二人を見ていて、事情を知る阿笠は、二人で出かけさせてやりたいと思っていたのだろう。そんな気遣いが、コナンには、嬉しかった。

「アイツら、知ったらついて来れないにしても、怒るだろうな」

「かわいそうじゃが、親戚の法事とでも言っておくかの。学校も休まなならんじやろ」

平日といえども、東海道新幹線は、利用者が多い。ビジネスや用務客、外国人観光客、修学旅行や年配の団体客。

阿笠とコナン、哀が3人掛けのシートに座っていると、どうみても、おじいちゃんに連れられた孫2人という感じだが、会話の内容を聞いていれば、その様相は、一変してしまう。

「それで、博士、その工場って、奈良のどのへんなの？」

窓際に座る哀が奈良周辺の地図を見て訊く。

「天理の東の方での。奈良駅まで、迎えに来てくれることになっておる」

「ホテルは、奈良市内なんだろう？遠くねえのか？」

隣に座るコナンが、哀のしている地図を覗き込んで言う。

「車で30分ぐらいらしい。送り迎えしてくれるそうじゃ・・・まあ、3日ほどかかるじやろうから、その間、奈良見物でもして、二

人つきり過せるぞ」

一番通路側に座る阿笠が、ニヤニヤして二人に言う。少なくとも、祖父が、小学生の孫に言うセリフではない。

フーっと、二人揃ってため息をつき、ジト目で睨む姿も、孫が祖父を見る様子とは、程遠い。

京都に着くと、近鉄に乗り換える。特急で約30分。午後2時過ぎ、近鉄奈良駅に着いた。

その工場の経営者は、松尾久雄といった。60歳だというのが、阿笠より若く見える。というより、阿笠が年以上に見えるのであって、彼の方が年相応の容姿なのだろう。

奈良県の中堅企業、松尾製作所の社長であるが、腰高なところは感じられず、コナンと哀に対しても、丁寧な挨拶をしてくる。

小学生二人だけにするのは、かわいそうだと、阿笠とは逆の気づかいをして、彼は、コナンと哀も一緒に来るように誘った。

「いや。この子たちは、しっかりしておるからの。ホテルさえ教えておけば、大丈夫ですよ」

「でも、やっぱり、子供二人を知らない土地に放っておくのは、どうかと思いますが・・・」

松尾の言うことの方がもっともである。

「博士、せっかくだし、僕達も行くよ。博士のロボットも興味があるし・・・」

コナンがそう言うと、すまん、といった表情で、阿笠が頷いた。哀も、目を閉じて、仕方ないという感じで首をすくめた。

松尾の工場は、天理市街から東へ少し行った、山の中腹にあって、市街が見渡せる。阿笠と一通り、工場を見せてもらうと、松尾と阿笠は、例の機械のところへ行き、コナンと哀は、応接室に案内された。

女性事務員が缶ジュースを持ってきてくれた。

「ここに居ても退屈でしょ？この裏、グラウンドの方で遊んできたなら？柵のあるところまでは、うちの敷地やから、遊んでても危なくないし・・・」

「うん、ありがとう・・・じゃ、行く」

コナンは、彼女から缶ジュースを受け取ると、哀の手を取って外へ出た。

工場に隣接するグラウンドは、テニスコートが2面ぐらいとれそうな広さがある。山が迫る方に簡単なベンチがあって、二人で座る。10月のさわやかな風が、山の木々の葉をざわつかせ、二人を包んだ。

「気持ちいいな」

「そうね」

コナンは、なんだか落ち着かない感じで、哀の顔色を覗っている。「どうしたの？」

哀が怪訝な表情で訊く。

「うん？・・・いや、おめえの部屋以外で二人つきりてのは、随分久しぶりだかな」

照れくさそうに頬をかくコナンに、哀はクスッと笑うと、

「そうね。ここじゃ、キスも、抱き合うこともできないし、持て余

すわね」

「おめえな、そういうことをサラッと言うなよ」

コナンが指で哀の頭を軽く小突く。

「ったく・・・もう少し、子供っぽくしろよな」

「あら、最近、自分では、子供っぽくなったと思ってるんだけど？

・あなたや博士に甘えてばかりいるし・・・」

「そういう意味じゃねえよ・・・でも、俺も、前は本当のガキになつちまうのが怖かったけど、今は、それもいいかなと思ってる」

「もう充分、子供じゃない・・・」

呆れたように言う哀の言葉に、コナンがその顔を軽く睨む。そして、フツと視線を外すと、

「おめえと一緒に、大きくなっていけるからな。これからは・・・」

そう言って、哀の手を握った。

「子供っぽくしろって言っときながら、この手は何？」

「おめえ、可愛くねえな」

コナンが哀に、こう言うのは、何度目だろう。二人にとって、もうこの言葉は、単なる決まり文句であって、本心の言葉とは違う。

だから、コナンも笑って言い、哀も笑って聞いている。

コナンは、工場の方を見て、人が見ていないことを確認すると、哀の頬に軽くキスした。

夕方には、奈良駅前のホテルにチェックインし、夕食は、松尾が知り合いの店で馳走してくれた。子供もいるということで、夜8時前には、ホテルへ3人を送ってくれた。

「すまんかったのう。明日は、わしだけで行くから、二人でゆっくり奈良観光でもしておいで」

阿笠がすまなさそうに言った。

「別に謝ることはねえよ。二人で、ゆっくり、できたし・・・な」

コナンが哀に同意を求めた。

「そうね。風が気持ちよかったし、久しぶりに彼とゆっくりできた気がするわ」

哀も、阿笠に微笑んで言った。

翌日、阿笠は、8時ごろには、松尾の会社の迎えの車で出て行った。

「さて、どこに行く？」

コナンが哀に訊く。

「そうね。とりあえず、このヘン散歩しない？春日大社と東大寺、興福寺、奈良公園・・・繋がっているし・・・」

「そだな。結構、広いな・・・ゆっくり、歩いてみるか」

二人は、とりあえず、春日大社を目指して歩きだした。

春日大社を参詣し、その周辺、飛火野から奈良公園を散策する。

このあたりには、鹿がたくさんいて、観光客から「鹿せんべい」をもらったりしている。

哀も、ひとつ買って、鹿に差し出すと、あっという間にたくさんの鹿たちに囲まれてしまった。鹿たちは、次々に哀が手にしている「鹿せんべい」を狙ってくる。

それだけでなく、次々に哀の手や胸、お尻に鼻を寄せてくる。ざつと、10頭はいるだろうか。

「ちょ、ちよつと」

鹿たちに、少し慌てる哀。

そんな様子を、コナンは、少し意地悪く、笑って見ていた。

「笑ってないで、助けなさいよ」

「いいじゃん。おめえ、動物好きだろ」

「もう・・・ちよつと、もうないわよ」

哀の手から、鹿せんべいは、すでに消えていた。それがわかると、鹿たちは、急に哀から興味を失ったように離れていった。

「ふう。あの子たち、随分、お腹空かせているのね・・・」

「動物好きのおめえとしては、悪い気はしねえだろ？アイツらに囲まれても・・・」

外国人観光客が、哀と同じように囲まれているのを見ながら、コナンがニコニコしている。

「でも、忙しいわね、少し・・・」

哀が苦笑している。

朝から、空は曇っていて、予報では、雨になっていた。しばらくして、そのとおり、雨が落ちてくる。

二人でひとつの傘に入って歩く。こういうとき、小さな体は、具合がいい。それでも、コナンは、哀が濡れないように、自分の肩を濡らして、哀の方に傘を差しかけている。

しばらくして、杉や松、かえでなど、木々が茂る公園内に、あずまやを見つけ、休憩した。

コナンが飲み物を買ってきた。缶ジュースを哀に渡すと、哀の隣に座る。哀は、ハンカチを取り出すと、黙って、雨に濡れたコナンの腕や肩を拭いている。

「サンキュ」

コナンが呟くように言う。拭き終えた哀がハンカチをポーチにし

まうと、二人で、黙って雨の音を聞いていた。

平日の午前中、まして雨でもあり、人影は少ない。雨の音と傍を流れる小さな川の水音しか聞こえるものはない。

哀は、目を閉じ、コナンにもたれかかった。

「いいわね。こういうのも・・・なんか、この世に二人つきりって感じがするわ」

「そだな」

雨は、激しさを増している。鹿が一頭、あずまやに入ってきて、コナンと哀の足元に座った。

「おめえ、邪魔すんなよ」

コナンが足元の鹿に微笑んで言う。鹿は、首だけを上げ、向こうを見ていた。

その様子に、哀がクスツと笑う。

「守ってくれてるみたい・・・」

二人で体を寄せ合って座っていると、ずっと座っていたい気分になる。会話がなくても、お互いの心臓の音や、息遣いを感じていると、安心できる。

最愛の人とこうして過す時間は、何ものにも代えられない。コナンも哀も、あまりに心地よくて、時間が経つのを忘れていた。

ふと、コナンがあたりを見回す。

雨は、相変わらず激しく、木々の葉やあずまやの屋根を強く叩いている。

誰もいないのを確認すると、自分の体に寄り添う哀を抱きしめた。

「ちよつと、人に見られたら・・・」

哀が目を開け、少し慌てている。

「大丈夫だよ。誰もいないって・・・ちよつとだけ、こうしていた

いんだ」

その言葉に、哀は、また目を閉じた。そして、コナンのぬくもりが体を全体を包んでくるような感覚に、涙がでそうになった。

コナンは、哀をゆっくり離すと、その顔を見つめて、少し照れたように笑った。

その時、足元の鹿が突然、立ち上がった。その顔が見つめる先を見ると、一頭の子鹿がいる。いくぶん弱くなった雨の中、ゆっくりと子鹿に近づくと、二頭は、一緒にどこかへ歩いていく。

「俺達もそろそろ行くか」

傘を手にしたコナンが、雨の様子を伺いながら言った。

「そうね。雨、小降りになってきたし・・・」

20分ほどすると、雨もやんだ。

興福寺の五重塔を右に見て、猿沢池を通り、「ならまち」を歩いた。

その中の一軒の店で、哀が鹿のデザインの小さな巾着袋を手に取った。それを見ている哀の目が細くなる。

「かわいいわね」

「買ってやるうか？」

コナンが隣で優しく言う。

「ありがと。でも、あの子たちへのお土産にどうかと思って・・・」

「そだな。じゃ、色違いで5つ買おうか？」

「いいの？」

「ああ。旅行に行くっていたら、かあさんが小遣いをくれたんだ・・・
おめえのために遣えって言うって」

相変わらず、この親子は、自分のために気遣ってくれる。哀は、なんとも言えない優しい表情でコナンを見た。その顔は、コナンをドキリとさせるには、十分だった。そして、素直に綺麗だと思う。

鹿をデザインした小さな巾着袋を5つ。阿笠に少し大きめなものをひとつ。そして、コナンと哀は、自分達に、お揃いのハンカチを買った。

「ぼくたち、二人で来たん？」

支払いをするとき、店の女性の店員が訊いてきた。

「おじいちゃんと一緒に来たんだけど、今、お仕事してるんだ」

「そうなん・・・どっから来たん？」

「東京」

「へえ、えらいね・・・これ、あげるわ」

そう言って、飴玉が入った袋をくれる。コナンと哀は、少し苦笑したが、素直に受け取った。

「ありがとう」

「じゃ、気をつけてね」

笑顔で手を振る店員に見送られ、「ならまち」を後にした。

午後は、東大寺大仏殿に行った。

「大きい・・・」

大仏殿を見上げ、哀が呟く。

「昔の木造建築ってさ、地震で倒れることが少ないらしいぜ」

「柱なんかの組み方に工夫があるのね」

大仏殿の中に、高さが16mもある奈良の大仏、盧舎那仏坐像がある。

その北東の柱に、幅40cm、高さ30cmほどの穴がある。

コナンがその穴を通りぬける。

「おめえもやれよ」

そう言われ、哀も通り抜けた。

「なんで、こんな穴があるのかしら？」

「北東の鬼門にあるから、魔除とも言うし、梁を通す穴を開けるのを失敗したから、上下を逆にしたとも言われてるらしいぜ」

「ふ〜ん・・・小嶋君は、絶対抜けられないわね」

「そだな」

二人で小さく笑った。

大仏殿を出て、南大門へ戻る。

コナンが哀の手を取り、二人で手を繋いで歩いていく。

「あれ、かわいいカップルやなあ」

「ほんまや、手繋いで、仲良さそうやなあ」

関西弁で、おばさんらが話す大きな声が聞こえてきた。コナンと哀は、少しビクツとして、思わず、声の方へ振り向いてしまった。

「やっぱり、可愛いでえ」

二人の顔を見て、おばさんグループが近づいてきて言う。5人だ。

「どっから来たん？」

「と、東京」

コナンが、おばさん達の迫力に後ずさって答える。

「えー、二人だけで、東京から来たんかいな？」

「いえ。おじいちゃんと・・・」

今度は、哀が後ずさって答えた。

「ほんなら、そのおじいちゃんって、どこにおんの？」

「今、仕事なんだ・・・」

コナンと哀は、すっかり囲まれてしまった。

「ほんま、可愛いわ。うちの子、こんくらいん時、もっと憎たらしかったけどな」

「あんたの子や、しゃあないやろ？」

「よう言うわ・・・そら、あんたとこの子は、可愛かったから、言われても、言い返されへんけど・・・」

二人のおばさんが言い合っていると、別のおばさんが言った。

「うちが子供の頃は、こんくらい、可愛かったで・・・」

すかさず、自分の子が憎たらしいと言ったおばさんの突っ込みが入る。

「ほんなら、この子、あんたみたいになるんかいな？」

「そらないわ」

これは、また別のおばさん。

「かわいそうやで、あんたとこの子、一緒にしたら・・・」

「そや、ぼくたち、これ、持って行き」

そう言って、可愛い子を持つというおばさんが、お菓子の入った袋を差し出した。

「いえ・・・結構・・・」

「何言うてんの！子供が遠慮なんかせんでええ！」

「そやそや。これも、あげるわ」

別のおばさんも、同じように袋を哀の手に持たせる。

「ほな・・・気いつけて行きや」

「バイバイや」

おばさん達は、囲みを解き、手を振って大仏殿の方へ去っていった。

コナンと哀は、渡された袋を手に、ポカンとして、しばらくそのまま立っていた。

「・・・なんなんだ・・・」

「関西に住んでたら、よく、こんな目に遭うのかしら？」

そう言い、顔を見合わせると、二人同時に吹き出し、しばらく笑っていた。

次の日は、土曜日だった。

この日の午後に東京へ戻る。阿笠と駅で待ち合わせている時間まで、二人は、今度は、駅に近い興福寺を訪ねた。

時間が迫り、駅へ向かって歩いていると、いきなりコナンが哀の手をひいて、物陰に隠れた。

「な・・・どうしたの？」

「しーっ」

コナンが自分の後に隠した哀に振り向き、人差し指を立てて口に当てた。

「しっかし、アイツがいつちゃん先に結婚するやなんてなあ」

そう言いながら、数人で歩いている若い男女。そのうちの一人を見て、哀が驚いた。

（服部君！）

二人は、息を潜め、平次たちが行ってしまふのを待った。

しばらくして、平次が遠ざかると、そっちを見ながら、二人が駅への道へ戻る。

「驚いたな。なんでアイツがここに・・・」

「あなた達、よっぽど引き合うものがあるのね」

哀が半目で呆れた表情で、小さくなった平次の後姿を見ている。

「あれ？コナン君と哀ちゃんやん！」

二人が平次の後姿を眼で追っていると、不意に後から声がかかった。

（しまった・・・アイツには、くつついてるヤツがいたんだ）

コナンと哀が恐る恐る振り返る。

「和葉・・・さん・・・」

（やっぱり・・・）

和葉が驚いた顔で二人を見ながら言う。

「なんで、こんなところにおんのん・・・しかも、二人だけ？」

和葉の目が細くなり、意味ありげな笑顔になってくる。

「えー、もしかして、二人だけで旅行？・・・マせてんなあ」

「ち、違うよ・・・阿笠博士が一緒だよ・・・駅で待ち合わせてんだ・・・」

コナンが両手を出して、言い訳している。

「和葉さんこそ、なんでここにいるの？」

哀が訊く。

「高校ん時の同級生が春日大社で結婚式挙げんねん。それで、平次や高校ん時の友達と来たんやけど、うちがトイレ行ってる間に、平次ら先に行ってまいよってん・・・」

コナンは、平次が行った方が気になり、チラッと伺い、和葉に言った。

「和葉姉ちゃん・・・平次兄ちゃんには、内緒にしといて・・・」

「なんで・・・ええやん」

「いや・・・お願い・・・もう、僕達、帰らないといけないし・・・」

和葉は、怪訝な表情をしていたが、笑顔になって言った。

「そやね、平次のあほ、みんなにいらんこと言いそうやもんな・・・ほんならコナン君。今度遊びに行くから、そんなときまで、貸しにし

とくわな・・・うちも行かなあかんし、また今度な」
そう言つと、和葉は、二人に手を振つて、平次たちの後を追いかけていった。

「あつたく、小学生相手に貸しつてなんだよ」

「さすが大阪人ね」

「そっか、奈良つて、大阪の隣だもんな・・・」

「だからつて、偶然に会う？普通」

二人揃つてため息をつくつと、駅の方へ歩き出す。

しばらくして、コナンが哀の手を取つた。

「でも、邪魔が入らなかつたし、楽しかつたな」

「そうね。久しぶりに、あなたと二人でゆつくり話もできたし」

「な、また二人でどっか行こうな」

「ええ」

繋いだ手のぬくもりと、反対の手に持っているいくつかの袋。そして、少し感じる足の疲れ。そして、心に残る暖かいもの。それは、今回の旅行で手にした、自分たちへのささやかなお土産。

今回のことを懐かしく話せるようになる時、どんな生活をしているだろうか。哀と二人、幸せであればいいと、コナンは、哀の横顔を見て思った。

（後書き）

奈良公園の鹿に囲まれたことがあって、それを哀に経験させることを思いついて書きました。

始めは、トラブルを起そうかと思って書き出したのですが、結局、ふたりにゆっくり旅行を楽しんでもらいたかったので、平穏な旅行記ということになってしまいました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7809c/>

ふたりの旅行記 ~ コナン哀ものがたり・番外編 4 ~

2009年7月1日21時21分発行